



原発取材に立ちはだかる二つの壁

渥美好司

3年前に朝日新聞をリタイアするまでは主に科学医療部に籍をおき、いまはフリーランスとして原子力ムラ界隈を歩きまわっている。いつも突き当たる難儀な壁が二つある。

一つは「非公開」という壁。どの産業にもライバルに知られたくない営業機密がある。原子力産業はもうひとつ、テロ対策（核物質防護）上の機密という分厚い壁がたちはだかる。

東京電力柏崎刈羽原発（新潟県）では2年前、テロ対策に多くの欠陥が見つかり、原子力規制委員会は是正措置命令を出した。核燃料の移動ができなくなり、再稼働の最終工程にすすめなくなった。東電は命令解除をめざして改善に努めてきた。しかし、規制委は5月、一部に不備が残っているとして、命令の継続をきめた。テロ対策案件の審査会合は原則非公開で、詳細を知ることができない。

柏崎刈羽には何十回も足を運んだ。遠目に監視カメラはみえるが、侵入防止対策の説明はしない。メディアの目が届かなければ、現場の緊張感はゆるむ。規制委から問題点の指摘をうけるまで、東電幹部はことの重大性に気づかなかった。

全国の原発の安全対策は、福島第一原発事故の教訓をもとに進められている。その伝でいけば、テロ対策は柏崎刈羽の事例をもとに改善されるのが筋だろう。しかし、他電力の技術者たちは「不備の詳細がわからないから、教訓を生かせない」という。テロ対策を口実に、原発敷地内での取材や撮影への制

限も日増しに強まっている。

もう一つの壁は放射線被曝の「リスク」である。

統計的には100～200ミリシーベルト以上の被曝で発がんリスクがたかまる。原発周辺自治体が避難計画をつくるときの手助けとして、規制委は住民の被曝を100ミリシーベルト以下に抑えるという目安をしめた。

この数値に反発する住民は少なくない。東北電力女川原発（宮城県）の周辺住民は、被曝リスクのたかい避難計画の問題点を軸に再稼働差し止めを求める全国初の訴訟をおこした。5月、仙台地裁は住民側の請求を棄却した。判決は被曝リスクの評価に踏みこまず、門前払いだった。

チェルノブイリ事故から4年たったころ、ウクライナに長期滞在して事故炉内部を取材した。溶け落ちた大量の核燃料がある区画に近づいたとき、放射線測定器の針が振り切れた。一瞬で1ミリシーベルト近くを浴びた。日本で自然界からうける年間被曝量の半分。100ミリからすればごくわずかだが、その日の夜は眠れなかった。

安全と危険の境界があいまいな被曝影響について、何人もの専門家に話をきいた。その一人のつぶやきが強く印象に残っている。「数ミリシーベルトでも肌感として気持ちが変わる」

テロ対策案件の公開と非公開の境界を含め、「あいまい」な世界でもがいている。

（ジャーナリスト 会員）

CONTENTS

巻頭言	1
総会報告	2
ニュース	
賛助会員交流会／ZOOM井戸端会議	4
科学ジャーナリスト賞2023 受賞者決定	5
科学ジャーナリスト賞2023 講評	6
科学ジャーナリスト世界会議	
世界会議報告と世界科学ジャーナリスト連盟	8

世界会議の写真グラフ	9
世界会議に参加して	10
例会報告（2月）	11
例会報告（3月）	12
例会報告（4月）	13
オピニオン／理事会から	14
事務局だより	16

ハイブリッド方式で総会開催

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は5月31日、2023年度総会を日本プレスセンタービルで開催した。リモート参加も可能なハイブリッド方式で開いた。対面での開催は2019年度以来4年ぶり。

今回は通常総会の前に、科学ジャーナリスト賞選考委員を務めている村上陽一郎・東京大学名誉教授に講演をしていただいた（詳報は9月号）。講演後の通常総会は、正会員の会場出席が25名、リモート出席が24名。議長委任の26名、事前の議決権行使1名と合わせて合計76名となり、定足数（正会員200名の5分の1以上）を満たした。22年度の活動報告と決算報告、23年度の事業計画と予算案、新理事選任について、会長と各委員長、塾長らが説明。質疑応答の後、いずれの議案も承認された。

総会後に開いた理事会で室山哲也氏の会長留任、各理事の担当を決めた。（事務局長 滝順一）

■月例会などの開催（倉澤治雄・企画委員長）

月例会は10回開催した。多くの会員が関心を持つバランスの取れたテーマ選択ができた。22年10月からはハイブリッド開催に移行した。また会員が自主的に提案し主宰する「ZOOM井戸端会議」の開催も7回を数えた。今後は月例会への参加者を増やし「オープンプラットフォーム」を模索していく。

■科学ジャーナリスト塾（高橋真理子・塾長）

第20期科学ジャーナリスト塾は入塾者18名。修了作品を締切までに提出して「修了証」を受け取ったのは10名だった。今期からウェブシステム「カンファレンスパーク」を導入し、講義録画のオンデマンド配信とリアルタイムのリモート講義を組み合わせたカリキュラムとした。宿題の指導にはアドバイザー、修了作品の作成にはメンターを配し、きめ細かな個別指導を心がけた。取材実習は医薬基盤・健康・栄養研究所（大阪府茨木市）と防災科学技術研究所（茨城県つくば市）の2カ所で実施、対面での取材活動の場を確保した。23年度も同じ方式で開塾する予定である。

■会報・ウェブなどによる情報発信（滝澤美奈子・編集広報委員長）

会報とホームページ、FacebookなどSNSを使って情報発信をした。例会についてFacebookとTwitterを連動させ幅広い事前告知に務めた。ホームページのニュース記事は20近くに達した。会報は4回発行、JASTJ会員が活動する国際会議や科学ジャーナリスト塾の様子を報告した。日本科学振興協会（JAAS）など志を同じくする団体との連携活動も収録した。

■科学ジャーナリスト賞（元村有希子・科学ジャーナリスト賞選考委員長）

科学ジャーナリスト賞2023は、23年4月8日に開いた最終選考会で優秀賞3作品（新聞1、書籍2）、特別賞1作品（展示）を選出した。大賞に該当する作品はなかった。応募総数は58作品で、23年2月の一次選考で10作品を選び、最終選考に残した。前年度の受賞贈呈式は22年6月4日に日本プレスセンタービルで開催した。24年度の作品募集は23年7月から開始する。

■国際活動（小出重幸・国際委員長）

23年3月開催の科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ）にJASTJ会員4名が参加した。参加支援のため寄付を募った。

会期中に開かれる予定だった世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）の年次総会は事務局の準備不足のため開催できず、次回（25年）の世界会議の開催地も決まらなかった。次回世界会議にはネパールと南アフリカが誘致の声を上げている。23年度はアジア諸国の科学ジャーナリスト団体と連携しながら25年の世界会議に向けたJASTJとしての貢献を検討していく。

■22年度決算報告と23年度予算（滝順一・総務委員長・事務局長）

22年度中の個人会員の入退会がともに16名。23年3月末の会員数は200名で前年度末と変わらなかった。賛助会員は1社（コズミックコーポレーション）増えた。収入は予算5,294,020円に対し5,266,564円とほぼ同水準だった。支出は予算5,569,000円に対し5,535,607円とほぼ同水準だった。22年度単年度収支は269,043円の赤字（予算では274,980円）となり、次年度繰越金は3,859,104円となった。予算段階で、新型コロナ収束に伴う月例会のハイブリッド化による支出増などを見込んでいたため、全体として予算通りの決算となった。23年度は経費の節減などに務める収支均衡を目指す。

国際委員会会計では、科学ジャーナリスト世界会議に参加する会員を支援する目的で寄付を募り、12名から560,312円をいただいた。参加者4人に対し410,000円を支給した。収支差額148,992円は繰り越した。

■意見交換

議案の採決後に出席者からJASTJの運営全般に意見や質問を受け付けた。「会計年度と総会での新理事の専任の時期がずれているのかなぜか」「会長がJASTJは過渡期にあると話した真意は」「J塾でのChatGPTの使用をどう考えるか」などの質問があり理事が回答した。

◆総会報告

2022年度 決算報告 (単位は円) 報告期間 2022年4月～2023年4月

収入		支出	
前年度繰越金	4,128,147	費目	摘要
会費収入	2,169,000	事務局職員給与	879,620
賛助会員 (17社21口)	2,520,000	事務所家賃	1,073,620
		会議費	(総会、理事会等会議室借用) 22,700
		交際費	(懇親会) 131,377
会費小計	4,689,000	備品・消耗品費	(文具、郵送代、OA機器等) 162,490
その他の収入	56,000	通信費	(電話、メール管理料) 240,688
参加費 (月例会、懇親会等)	383,391	支払手数料	(振込手数料、ビジネスWEB) 74,380
ジャーナリスト塾会費	129,210	源泉徴収税	(講師料など) 52,531
寄付	8,926	事務局総務委員会予備費	(会計作業費、総務関係費、交通費など) 108,910
雑収入	37	雑費	6,480
利子		管理関係小計	2,752,796
		企画委員会 (月例会)	(会場費、講師代等) 607,239
		企画委員会 (ジャーナリスト塾)	(会場費、講師代等) 374,083
		編集委員会	(4回会報発行分、HP運営費) 783,999
		国際活動委員会	(世界連盟会費等) 340,560
		科学ジャーナリスト賞委員会	(会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等) 676,930
		委員会予備費	(特別プロジェクト費) -
その他小計	577,564	委員会小計	2,782,811
当年度収入合計	5,266,564	当年度支出合計	5,535,607
		収支	-269,043
		次年度繰越金	3,859,104

2023年度 予算計画 (単位は円)

収入		支出	
前年度繰越金	3,859,104	費目	摘要
会費収入	2,280,000	事務局職員給与	700,000
賛助会員	2,520,000	事務所家賃	1,200,000
		会議費	(総会、理事会等会議室借用) 60,000
		交際費	(懇親会) 100,000
会費小計	4,800,000	備品・消耗品費	(文具、郵送代、OA機器等) 120,000
その他の収入	40,000	通信費	(電話、メール管理料) 200,000
参加費 (月例会、懇親会等)	400,000	支払手数料	(振込手数料、ビジネスWEB) 70,000
ジャーナリスト塾会費	0	源泉徴収税	(講師料など) 50,000
寄付	60,000	事務局総務委員会予備費	(会計作業費、総務関係費、交通費など) 130,000
雑収入	0	雑費	10,000
利子	0	管理関係小計	2,640,000
		企画委員会 (月例会)	(会場費、講師代など) 700,000
		企画委員会 (ジャーナリスト塾)	(会場費、講師代など) 400,000
		編集委員会	(4回会報発行分、HP運営費) 800,000
		国際委員会	(世界連盟会費等) 40,000
		科学ジャーナリスト賞委員会	(会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等) 600,000
		委員会予備費	各委員会予備費、特別プロジェクト費 120,000
その他小計	500,000	委員会小計	2,660,000
当年度収入合計	5,300,000	当年度支出合計	5,300,000
		収支	-
		次年度繰越金	3,859,104

2023年度の理事及び監事と主な担当

会長	室山哲也		佐藤 年緒	総務、編集広報
副会長	柏野 裕美	総務 (DX担当)、J塾、国際	高木 鞠生	編集広報
	倉澤 治雄	企画委員長	都丸 亜希子	J塾、編集広報、J賞、企画
	高橋 真理子	J塾長、総務、国際	中道 徹	総務、J賞
	瀧澤 美奈子	編集広報委員長 (web編集長)	西野 博喜	J賞
事務局長	滝 順一	総務委員長、J賞	長谷川 聖治	国際、企画、総務
会報編集長	瀧澤 美奈子	(新)	藤田 貢崇	総務 (システム)
理事	縣 秀彦	企画	三井 誠	J賞
	飯島 裕一	J賞	三輪 佳子	編集広報、企画、国際
	井上 能行	編集広報	村松 秀	J賞
	内城 喜貴	編集広報、企画	元村 有希子	J賞委員長
	大池 淳一	J賞	森 時彦	企画委員長代理 (新)、総務
	大江 秀房	編集広報	山本 威一郎	総務
	鴨志田 公男	編集広報、J賞	北村 行孝	
	小出 重幸	国際委員長、編集広報、企画	佐藤 征夫	
	今野 公美子	J塾	武部 俊一	
	佐々 義子	J賞	牧野 賢治	
			監事	
			顧問	

注) 50首順。(新)は新任。各理事が所属する委員会は、企画、編集広報、科学ジャーナリスト賞 (J賞)、国際、総務、J塾の6委員会体制。
 (特記) *「総務」には「会計・財務」が含まれる
 **会報製作体制 (新) 会報編集長: 瀧澤 会報デスク: 鹿見島 (会員) デスク業務を行う 会報編集委員会 (編集方針や企画出し): 鴨志田、高木、佐藤、三輪、内城、井上+a

賛助会員との交流会

賛助会員の皆さんとの交流会を3月3日（金）18時から日本プレスセンタービル10階ホールで開いた。毎年夏の恒例行事だった交流会は、新型コロナ流行のため長らく中断、2019年8月以来、およそ3年7カ月ぶりの対面による開催となった。

交流会には賛助会員5団体から13人が参加し、JASTJからは理事、会員ら18人が出席した。

司会は室山会長が務め、まず滝事務局長から最近のJASTJの活動に関し2年ぶりに再開した科学ジャーナリスト塾の盛況ぶりなどを報告した。その後、高橋副会長の音頭で乾杯し、飲み物を手に立食形式で歓談に入った。

参加された団体の代表の方からはそれぞれ5分間程度の短い挨拶をいただいた。みなさんがそろって口にされたのは「直接対面で交流する楽しさ」と、それぞれのお仕事の内容を社会に広く伝える「コ

ミュニケーションの大切さ」だった。また賛助会員として、どのようにJASTJの活動に関わっていくのが望ましいのかを問いかける声もあった。

笑いが絶えない和やかな時間があっという間にすぎ、最後に室山会長が「途絶えがちだった賛助会員の方々との交流を温めていきたい」と締めくくった。（事務局長 滝順一）



交流会1：久しぶりに開かれた会員と賛助会員の交流会（日本プレスセンターで小林隆司撮影）

ZOOM 井戸端会議

ZOOM井戸端会議が5月に相次いで開催された。

5月12日は「高等学校の理科教育を考える」と題して、JASTJ会員（要確認）、東邦大学理学部教授でNHK高校講座の講師も務めている今井泉さんを招いて話を聞いた。合いの手は理事で国立天文台准教授の縣秀彦さん。

日本の科学技術力の劣化が言われて久しいが、原因の所在は大学などの高等教育機関だけではない。高等学校での理科教育が大きく変貌しつつあり、実は「熱」や「温度」について、正確に学ぶ高校生の数が減っているのだそうだ。

理科（物理・化学・生物・地学）にあてられる時間が減ってきた。その中で実験がさらに減った。選択科目制にも問題がある。教員の側も、物理・化学・生物・地学を教えられる人材が揃っていない。知識やスキルを教えるよりも、好奇心を育むことを狙った方がいいのではないか。社会人や大学院生の活用を考えてはどうか。そもそも理系・文系と分けることに問題がある、などと話題は尽きなかった。

5月16日は「地球を脅かす小惑星の真実」と題して、長年、宇宙の安全を見守る日本スペースガード協会でも活動されている理事の山本威一郎さんから話を聞

いた。合いの手は企画委員長の倉澤治雄さん。最近では、スペースガードをプラネタリーディフェンスというらしい。NECで長年航海用ナビゲーションシステムの開発に取り組んでこられた技術者の山本さんが、どうしてこの分野で活動されるようになったのか。個人史を交えながら、これまでの小惑星衝突の歴史を振り返り、今後を展望した。

折しも「2023DW」という小惑星が2046年のバレンタインデーに、約625分の1の確率で地球に衝突するというニュースがあり、米航空宇宙局（NASA）が世界で初めて探査機「DART（ダート）」を小惑星「ディモルフォス」にぶつけて、軌道を変える実験に成功したというニュースがあった。

地球に衝突する可能性のある小惑星は何万個もあり、まだまだそれらを補足しきれていないという。6600万年前の小惑星衝突によって恐竜が減じたといわれているが、同じことが起こる可能性は否定できない。そのとき人類はどう対処するのか？ 観測強化が最大の防御策ではないか。月や火星への移住。衝突によっておこる災害への食糧や水の確保。さらには、文明をどう残すのかなどなど、時間いっぱいまで議論が続いた。（理事 森時彦）

優秀賞3点を選ぶ 特別賞に年縞博物館

「科学ジャーナリスト賞2023」の最終選考会を4月8日に日本プレスセンターで開催し、優秀賞に3作品、特別賞に1作品を選んだ。同賞は優れた科学報道や著作、コミュニケーション活動を顕彰する賞で、今年が18回目。特に優秀な作品に贈る「大賞」は該当作品がなかった。

応募総数は新聞3、書籍37、映像10、ウェブ4、ラジオ1、企画展示3の計58件で、2022年の72件に比べて少なかった。最終選考では一次選考を通過した10件（新聞2、書籍5、映像2、展示1）が選考対象となった。

選考委員が事前に提出した評価点を総合すると、作品間に大きな差はなく、絞り込みが容易でないとの判断から、元村委員長は全ての作品について選考委員全員から意見を求め議論の土俵づくりを先行し、ひと通り意見表明が終わってから選考本番に入った。

福井県年縞博物館の常設展への特別賞贈呈について選考委員に異論はなく早々に「特別賞」が決まった。残り9作品のうち、書籍「魔炉という幻想」の評点が比較的良かったため、これを除いた8作品を巡って議論が展開した。

毎日新聞「査読偽装」はスクープ性を高く評価する声がある一方、長く続いてきた論文査読の慣行を不用意に壊しかねない、現場の当事者への心遣いを欠くといった意見があった。上毛新聞「脳とこころ」には地方紙としての力量を高く評価する声があり、どちらかを選びかねる状況となった。

映像作品においても、琉球朝日放送「命ぬ水」はまさに全国的に問題視する動きが広がりつつある化学物質に対し早くから警鐘を鳴らした点を高く評価する声がある一方で、この化学物質のリスクに関す



応募作のレベルが高く、初めて投票で受賞作を決めた最終選考会（日本プレスセンターで、都丸亜希子撮影）

る評価はまだ不確定であるとの慎重意見が出た。NHKスペシャル「超進化論」には、科学的な知識や見方を決して曲げることなくわかりやすく盛り込んでいるとの好評価があり、支持が分かれた。

書籍の5作品についても評価がさまざまあった。

最終的にJ賞の最終選考では初めて、投票によって決めることにし、8作品から各委員が3作品を選び投票を行い、得票数の多い3作品を受賞作とした。表に示す3作品で、映像作品は入らなかった。最終決定には選考委員から異論はなかった。また大賞に相応しい作品がない点でも意見が一致した。

J賞は「ジャーナリスト賞」と銘打ってはいるが、科学への理解を広めることを目的とした科学者や博物館による啓発的な作品をも評価の対象としており、選考の幅が広い。選考委員の意見が分かれるのは、必ずしも科学者の選考委員対JASTJの選考委員という図式とは限らない。評価軸が多様であり、異なる専門性と価値基準を備えた10人の選考委員が議論を尽くして選考する点にJ賞のユニークさと価値がある。傍聴して改めて思いを強くした。

多数の候補作を推薦していただいたみなさんと、一次選考、最終選考に携わっていただいた選考委員、会員のみなさんに改めてお礼を申し上げたい。

（事務局長 滝順一）

科学ジャーナリスト賞 2023 受賞作品

大賞	福井大教授「査読偽装」を巡る一連のスクープ	鳥井真平、柳楽未来（毎日新聞）	新聞
優秀賞	「美食地質学」入門～和食と日本列島の素敵な関係	巽 好幸	書籍
優秀賞	「情報パンデミック あなたを惑わすものの正体」	読売新聞大阪本社社会部 （代表・中沢直紀）	書籍
特別賞	福井県年縞博物館 常設展	福井県年縞博物館 （代表・吉田昌弘館長）	博物館

選考委員（敬称略）【有識者委員】相澤益男、浅島誠、大隅典子、白川英樹、村上陽一郎
【JASTJ委員】大池淳一、佐々義子、三井誠、村松秀、元村有希子（委員長）

書籍のレベルが上がっている

「科学ジャーナリスト賞2023」の選考にあたって有識者委員に講評を書いていただいた。受賞理由が分かりやすく解説されている。最終審査に残った10作品のうち5点が書籍だったが、全体講評では、書籍のレベルが上がっていると評価された。

全体講評

選に漏れた映像作品も良かった

大隅 典子

科学ジャーナリスト賞(J賞)の審査は毎年、苦しみながらもやりがいのあるタスク。本年は、新聞2作品、書籍5作品、映像2作品、博物館1館が二次審査の対象となったが、予定の時間を大幅に超える審査会となった。



最初に「特別賞」候補とされた「福島県年縞博物館」は別として、最終的に審査員の投票を経て、優秀賞として新聞1点と書籍2点が選ばれた。審査員の意見が割れた作品が多かったため、今年は大賞の作品はなし。

映像作品として一次選考を通過していたのは、琉球朝日放送による『命ぬ水～映し出された沖縄の50年』と、『本当の“多様性”ってなに？ 地球の知られざる姿に迫るNHKスペシャル「超・進化論」』の2作品。前者は、米軍が使う「泡消火剤」に含まれるPFASという有害物質が沖縄の河川の水源汚染を招いていることに関して、米軍や米連邦議会資料、内部告発者からの映像や写真、専門家への取材等をもとにした、きめ細やかな作りが印象的であった。委員から「他局も協力していたことも特筆に値する」というコメントもあり、筆者としても“押し”の作品だった。

Nスぺの方は、進化に関する三部作のうちの第1集「植物からのメッセージ」と第2集「愛しき昆虫たち～最強の適応力～」が対象。最先端の研究成果を扱い、研究者から提供を受けた最先端のイメージング画像や、高感度カメラによる技術の粋を尽くした映像により、圧倒的なビジュアルであったが、

科学エンターテインメントとして、豪華芸能人キャストを使った寸劇による説明部分に関しては、評価が分かれた。

総評として、書籍のレベルが上がってきていることを感じる。科学技術に関する優れた報道や啓発活動などを顕彰する本J賞が1回限りの応募であることが実に残念である。(東北大学副学長、教授)

毎日新聞 偽装査読

新たな研究不正を明らかに

浅島 誠

研究不正として論文の捏造等は良く知られているが、今回、新たな研究不正として「査読偽装」があり、その存在と実態を新聞紙上で12回の記事として掲載したことは高く評価できる。



福井大学の教授が査読者の千葉大学の教授との間で、査読者に成り代わり「自作自演」を行った査読偽装の行為は学術研究の質の保証と公平性を著しく欠くものである。査読は科学の正当性と信頼性を確保する手続きであり、研究成果の公表にとっては重要なプロセスである。研究の公正さの必要性については近年は国内外のアカデミーや学術会議、文部科学省でも指摘されてきたことであり、それにも逸脱している。

査読は一般に同じ分野やボランティア活動として行われるので、中々、表面には出にくい面がある。今回の査読偽装が個人の問題か学術界の問題かという点において議論はあるが、この掲載記事を契機として関係論文撤回やプロジェクトPMの辞任および出版社も文科省も査読の適正化の通知を出すまでに発展している。

このスクープは学術界の研究不正に長く真摯に取り組んできている鳥居記者のよるところが大きい。学術の健全な発展と社会からの信頼を取り戻すために、今回のスクープの果たした役割は大きいと言える。(東京大学名誉教授)

巽 好幸 「美食地質学」入門

なぜ和食は美味なのか

相澤 益男

マグマ学を専門とする地球科学者が、「なぜ和食は美味なのか」に挑み、「美食地質学」という新しい研究分野を切り拓いた。ユネスコの「無形文化財」に登録されていることもあり、ツーリズム絡みの和食グルメ本はやたらと多い。だが、本書はいささか違う。



和食の美味は、日本列島が世界一の変動帯だからだ、と意表を突く。大地のシワで瀬戸内海という天然の生簀が生まれ、琵琶湖や若狭湾・伊勢湾は列島のくびれによって実に多彩な魚介類の宝庫となった。こう説明されると、腑に落ちる。

ただ本書の真骨頂は、こうした豊かな食材が、なぜ世界に類のない和食文化を生み出したのかを解き明かすところにある。たとえば、出汁、醤油、蕎麦・うどん、豆腐、日本酒だ。日本の地質に豊富な軟水との関わりが、見事に繰り広げられ、美食地質学の門を開く。ただ、筆者も指摘しているように、変動帯日本は自然災害大国である。美食地質学のパラダイスが根底から揺さぶられていることにも目を向けたい。(科学技術国際交流センター会長)

読売新聞 情報パンデミック

誰もが発信源というメディア

村上 陽一郎

「陰謀論」という言葉が時々聞こえてくる。アメリカの話だと思い込んでいた。本書が扱うテーマも、もともとは、トランプ前アメリカ大統領の選挙戦に絡んで流れ始めた陰謀論だった。だが、新型コロナのパンデミック化に飛び火して、日本でも拡大したらしい。その実態を、SNS上で火元になって発信する人々に、直接にぶつかって取材し、彼らの生の声を集める、



という至難な作業も含めて、極めて丹念に追いかけた新聞記事を書籍化した、迫真のルポルタージュである。

正直なところ、とてもまともな精神、あるいはまともな神経を持ち合わせている人間には、理解できないような話だが、読者は、偽りのない現実を突きつけられた思いである。と同時に、SNSによって、今までそうした機会を持ち合わせなかった市井の人間が、自分の思うところを社会に向かって発信できるメディアを手に入れたことを意味するわけで、メディアという概念の根本的変革が起きていることに改めて気づかされた。(東京大学名誉教授)

特別賞 福井県年縞博物館

世界的な研究成果を社会に還元

白川 英樹

福井県三方町の水月湖は極めて特異な湖である。流れ込む川がなく、周囲を山で囲まれているために強風で湖面がかき乱されることがない。水深が深く、湖底は静かで酸素がなく、生物が生息できない。そのうえ、地殻変動で湖が沈みつつあるために、四季折々の沈殿物が樹木の年輪のように縞模様になって堆積している。「年縞」と名付けられたこの縞模様の数を数えることにより、7万年前までの年代を正確に知ることができるので、年代測定の世界標準尺度として使われるようになった。



2018年9月に開設された福井県年縞博物館は、この世界的な研究成果を記念すべく45 mもの縞模様をした泥のコアを薄片に加工して特殊な処理を施した上で、横長の建物の壁に展示すると共に、年縞の研究施設を併設した世界唯一の年縞の博物館である。

易しさや親しみやすさを強調するための漫画やキャラクターなどの使用におもねることなく、見学者の理解を深めるために随所に工夫が施されている。博物館としてのかたちで最先端の研究成果を、公共の知的財産として社会に公開するという地元自治体の心意気も評価された。

(筑波大学名誉教授)

世界の科学ジャーナリストら500人超

コロンビア・メデジン市に集う

第12回科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ2023）が、2023年3月27日～30日、南米コロンビアの第二の都市、メデジン市の「メデジン植物園」を会場に開催された。

COVID-19 パンデミックの影響で当初予定から2年遅れたが、ラテンアメリカ地域を中心に20数か国から500人を超えるジャーナリスト、研究者らが集まった。日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）からは、小出重幸、高橋真理子、三輪佳子、照山恵美子の4名が参加した。韓国や中国からの参加はなく、東アジアのプレゼンスをJASTJが示した形になった。

会場の植物園は、標高1500mの同市中心街にありながら14ヘクタールの敷地に熱帯林が維持され、4500種の花、139種類の野鳥が生息。玲瓏な木立の合間から周囲の2500m級の山並みを展望でき、20世

紀末の麻薬犯罪都市のイメージを払拭する存在となっている。高い天井を持つ野外スタジオを主会場に、管理棟の会議室なども併用、音声・映像技術を駆使した手際よい大会運営が印象的だった。

セッションでは、グローバルサウスの課題が多く取り上げられた一方、女性研究者問題、気候変動や食料安全保障といった共通課題も議論された。メインのセッションには英語・スペイン語の同時通訳がついたほか、スペイン語だけのセッションもあり、言葉の多様性に気を配った運営でもあった。

イベリア半島と中南米の国々はスペイン語を共通語にコミュニケーションが図れるが、アジア圏では使われる言語が多様で、2015年のソウル大会のように結局、英語での討論にならざるを得ないという地域の特性も感じた。（理事 小出重幸）

世界会議 日本開催を望む声も

「世界科学ジャーナリスト連盟(WFSJ)」は、世界会議のときに年次総会（AGM）を開く決まりになっているが、今回は総会を開けず、代わりに「情報交換会」が行われた。

説明に立ったミリカ・モムチロビッチ世界連盟会長によると、コロナパンデミックのため対面での会議ができず、活動資金収集も十分にできなかったことから、財政的に逼迫。専任の事務局長を雇用せず、また借りていた事務局スペースも返却するなどし

た。このため「決算、活動報告、予算編成などの通常活動がほとんどできず、コロンビア会議を実現させるだけで精一杯だった」という。

情報交換会に集まった各国のジャーナリスト組織の代表を前にモムチロビッチ会長は謝罪したうえ、2023年6月に予定される連盟の理事選挙後に事務局体制を組み直し、新体制発足後にオンラインで「年次総会」を開催し、保留になっている決算報告や年次計画などの承認・採択をする計画だと説明した。

次回の世界会議については、ネパールと南アフリカの代表がそれぞれ2025年の誘致を考えていると語ったが、具体的な開催プランの提示はなかった。一方で、英国の「科学ライターズ協会（ASW）」が2027年は創設80周年に当たることから、同年の世界会議をロンドンで開きたいと表明した。会場や予算（約2億円）なども具体的に説明し、準備の周到さを印象付けた。

何人かの代表から「そろそろ日本で開催を」と言われ、東京で開かれた第1回会議（1992年）以来の開催を検討しなければならない時期にあると感じた。

（理事 小出重幸）



第12回科学ジャーナリスト世界会議に参加した会員。左から照山恵美子、小出重幸、三輪佳子、高橋真理子の各氏。（コロンビアのメデジン植物園で）

写真で振り返るWCSJコロンビア大会



主会場となったメデジン植物園の野外スタジオ



1日目の夜に開かれた開会式で挨拶するコロンビア科学コミュニケーション・ジャーナリズム協会会長のヒメナ・セラノさん（左端）。

第12回科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ）コロンビア大会の主なイベントは、すべてメデジン植物園の野外スタジオで開かれた。コロンビアの空は一日のうちにコロコロ変わり、スコールのような激しい雨が降ったこともあったが、天井があるので問題なく会議が続けられた。会場後方では、国際組織などがブースを設け、随時、参加者たちの質問に答えていた。

今回は世界連盟の会長もコロンビアの協会会長も女性で、スピーカーも女性のほうが多く、ひときわ「女性活躍」が目立った。（高橋真理子 副会長）



閉会式の後には音楽に合わせてみんなで踊った。これが「コロンビア流」だとか。（小出重幸撮影、これ以外は高橋真理子撮影）

メデジン市民の誇りとなっている公共交通機関メトロ

市内だけで250万人、郊外を含めると350万人以上が暮らしているメデジン市で、市民生活に欠かせない足となっているのが、公共交通機関のメトロだ。コロンビアで電車が走っているのはメデジン市だけで、市民はとて誇りにしている。科学ジャーナリスト世界会議の場でも、メトロの歴史や意義を伝えるミニセッションがあった。

1985年に着工、1995年11月末に営業を開始した。地上の高架を走る電車で、日本と同じように、磁気カードを購入して運賃をチャージして乗る。南北に走るA線（21駅）と東西に走るB線（6駅）があり、運賃は一律2.5ペソ（日本円換算75円）だ。

日本の電車に比べて横幅が広く、車内もゆったりしていて、どの駅の構内にもチリー一つ落ちていないのが印象的だった。

（会員 照山恵美子）



車両の横幅は日本の電車より広い。



メトロの駅に立つ筆者（ともに高橋真理子撮影）

日本の「いま」と「これから」に不足しているのは何か

科学ジャーナリスト世界会議コロンビア大会(WCSJ2023)は、「南」の国々(グローバルサウス)の存在感が確実に増す中で準備され、開催された。会議の中でもっとも頻繁に聞かれた単語は、“global(地球レベルの)”、“pandemic(パンデミック)”、そして“diversity(多様性)”の3つであろう。日本の「いま」と「これから」のキーワードでもある。

地域主権と規制がイノベーション促進?

3月28日午後開催された最初のプレナリー・セッションでは、公衆衛生・科学行政・政策決定の立場から、政治と科学が「新型コロナ」という脅威に対応せざるを得なかった場面の数々が、失敗への反省も含めて語られた。また、科学ジャーナリズムに不足している要素についても、大局観と個別具体的事例の両側から議論された。タイミングを逃さずに各国の政治を動かし、非先進国でも国民の生命や健康が守られるためには、科学に基づく地球レベルの規制が必要になる。その時、規制はイノベーションをもたらす何かにもなりうるという。

日本においては、「あらゆる人の人権を尊重すること」と「経済的な豊かさの追求」、そして「規制」と「イノベーション」は、未だに対立項と考えられているが、本当にそうなのだろうか? ともあれ、新型コロナに関する情報公開が不十分だった東アジアへの視線は厳しいものだった。その東アジアに、日本も属している。

科学ジャーナリズムと「笑い」のユーモアあふれる関係

ピンクのドレスに身を包んだソフィア・エスピ氏が、「STEMがSTEAMになることで、数多くのポテンシャルが生まれ、ユーモアを含められるようになりました」という印象的な一言を発したのは、大会終盤の3月30日午後開催された「科学ジャーナリズムの中の笑い」でのことだった。STEAM(Science, Technology, Engineering, Arts, Mathematics)の「A」、すなわちArtsに、なぜ、ユーモアや笑いが結びつくのだろうか?

このセッションは、コロンビア在住の科学ジャーナリスト、ウォルフガング・ゲーデ氏の冷静な“ボケ”と、エクアドルの大学で科学コミュニケーションの責任者を務めるエスピ氏の情熱的な“ツッコ

ミ”による軽妙かつ知的な掛け合いの連続、そして止まる暇もない参加者の笑いの中で進行した。エスピ氏によれば、人間が何かを理解するためにはユーモアが必須なのである。カール・セーガンの「伝わらないものは存在しないのと同じ」など先人たちの印象的な言葉とともに、科学者や学生たちによる“伝える”試みの数々、そして参加者がすぐに始められる具体的な工夫の数々が紹介された。

聴衆からは「SNSの効果的な使い方がわからない」「達成を断念しがちな女子学生をどう励ませばよいのか」といった質問があった。SNSもジェンダーも人類共通の課題であろう。セッションは、「さあ、ユーモアをもって、政府と大学に働きかけましょう」という言葉と大きな拍手で締めくくられた。

* * *

WCSJへの参加は4回目だが、今回は最も「わざわざ来てよかった」という実感がある。しかし、私の満足度を100点満点で示すと「75点」というところだ。

最大の減点材料は、「コロンビア」と「メデジン」ゆえの機会が十分に活用されていないように感じられたことである。たとえばコロンビアでは、男子に兵役(18歳より1~2年)が義務付けられている。本人の進学やキャリアとの関係は? 兵役を課せられない人々との間の軋轢は? そういう本音を直接聴きたかったが、会議で話題になることはなかった。

現地・現場の理解に関する不全感は、おそらく参加者の多くが大なり小なり持ったのではない。最も惜しまれるのは、日本から40歳代以下が一人も参加しなかったことだ。次回以降、若い人々の積極的な参加を期待したい。(理事 三輪佳子)



「科学ジャーナリズムの中の笑い」のセッションで「理解するためにはユーモアが必須」と語るエスピさん

「心臓を治す」を追い求めて 科学の進歩にメディアが果たす役割は？

2023年2月の例会は、大阪大学大学院医学系研究科特任教授の澤芳樹氏を招いて東京都千代田区の日本プレスセンタービルで開かれた。心臓外科医として、また心臓をターゲットにした再生医療の開発でも知られる澤氏。直近ではiPS細胞由来の心筋細胞シートを開発しており、例会の数日前に最新の症例について発表したばかりだった。まさにホットな話題だが、会員の多くと澤氏の間には、過去にも熱いぶつかり合いがあったようだ。

ドナー不足解消へ再生医療に期待

澤氏の講演は心臓移植の歴史から始まった。世界初の心臓移植は1967年、南アフリカで行われた。その後、免疫抑制剤で拒絶反応を抑えられるようになり、移植の件数は増えてきている。しかし澤氏は、それでも移植の必要数には到底足りないと話した。順番待ちの年数だけでなく、ドナーの死を待つというつらさが患者にかかるという面でも、心臓移植は理想的な状態にはなっていないと訴えた。

そこで期待するのが、ドナーを必要としない再生医療だ。ES細胞やiPS細胞が登場し、多能性幹細胞を使った人工の心筋で心臓を治す手段が見えてきた。細胞をシート状に加工し、心臓近くに生着させるという手法も確立された。澤氏が関わった研究により、2016年には、患者自身の筋肉から作った細胞シートの「ハートシート」が実用化された。現在は、iPS細胞から作る心筋細胞シートを開発している。

患者の細胞ではなく、ストックされているiPS細胞から心筋を作れば、より多くの患者に治療を届け

られる。澤氏らは現在、大阪で作った心筋シートを遠距離に輸送しての治験を重ねている。72時間までの輸送時間に耐えられるとすることで、「ほぼ世界中に搬送できる形態」だという。



澤 芳樹さん

報道の質を 真っ向から問う

講演の中で澤氏は、メディアの報道の手法に疑問を投げかけた。日本で初めて、臓器移植法に則って脳死判定のもとで心臓移植がされたのは1999年のこと。会員の中には、当時の取材を担当した人や、デスクだった人が多く居た。筆者は若輩のため、当時を知らない。しかし、和田心臓移植以来の移植で、前々から取材攻勢に熱が入っていたと聞き、その中で渦巻いた感情だけは想像できた。澤氏は当時、心臓移植関連の取材対応で、記者に根気よく相對したという。

そんな澤氏自身も、iPS細胞由来心筋シートの治験開始時には、取材に訪れた記者らに不信感を抱いたとのことだ。説明した内容が伝わっていなかったり、根拠に乏しい批判を受けたりといった経験が原因だ。「心臓移植の取材時の記者はものすごく勉強して来ていた。最近の取材では、記者側の事情もわかるが、もっと勉強したらこんな記事にはならないということもある」。その言葉は、まさに「最近」、澤氏ら再生医療研究者の取材を担っている筆者の耳には痛かった。

講演の最後には、2022年に行われた、ブタからヒトへの心臓移植が話題に上った。遺伝子改変で拒絶反応を抑えたというもので、澤氏は「これはすごいことだ」と褒め称え、「これを是とするか、非とするか。心臓移植や、iPS細胞由来心筋シートと同じで、先端医療とはこうして(世の視線にさらされながら)進むものだ」と締めくくった。メディアによる世論形成は、新技術の推進、あるいは監視にまだまだ強い影響力を持つ。誠意ある報道のために、現場の記者として努力する思いを新たにしたい。

(会員 菊池結貴子)



ハイブリッド方式で開かれた2月例会（日本プレスセンターで、都丸亜希子撮影）

失われた脳機能を再建するBMI

一人で医工連携を実現

病気などで失われた脳機能を工学的に再建する技術の研究開発に取り組んでいる大阪大学大学院医学系研究科脳機能診断再建学共同研究講座特任教授の平田雅之さんを講師に、3月例会が3月10日、オンラインで開かれた。平田さんは「BMIが開く脳機能の診断・再建技術の現状と今後の展望」をテーマに話した。

脳の信号で動くロボットアーム

平田教授は、異色の経歴を持つ。東京大学工学部修士課程修了後に自動車会社でエンジニアとして働いた後、脳の研究をやりたいと大阪大学医学部に入学し、医学博士の学位を取得した。人間の脳の機能に興味を持ったのは、ロボットの研究がきっかけだったという。

講演が始まるとすぐに2007年撮影のビデオが始まり、ロボットアームが、被験者の手の動きと同じように動いて、赤い球を握り、離す様子が映し出された。「解像度がちょっと悪いですが、脳の信号だけでロボットをコントロールしている。研究を始めて1年ぐらいで、できるようになった」と説明した。

BMIとは、人の脳とコンピューターを直接つなぐ革新的な技術だ。「脳の信号をコンピューターで解析できれば、思い通りに機械を操作できる」ことから、失われた運動機能、言語機能を再建する技術として期待されている。対象疾患は、ALS、脊髄損傷、切断肢、脳卒中の後遺症など。「再生医療でも研究が進められているが、神経系ではネットワークを再構築するのは非常に難しい。それよりは電気回路、メカを用いて再建の方が技術的にはよほど簡単だと思っている」と自信をのぞかせた。

この後、サルがロボットアームを使ってえさを食

べているビデオが流れた。米ピッツバーグ大学のチームが2008年の研究で、サルの脳に約100個の電極をさすだけで、コントロールできている。続いて、2012年にはピッツバーグ大学やハーバード大学で、人でも臨床研究がなされた様子がビデオで紹介された。



平田雅之さん

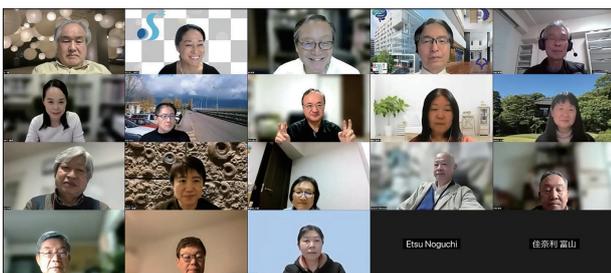
次のビデオもロボットアームで、ペットボトルを握る動作をしている。このロボットアームは、AIが被験者の頭蓋内脳波を解読して動いている。脳波で読み取っているのは、ペットボトルをつかみたい、という意味だけで、あとはAIが勝手に計算してボトルを握る。脳信号に頼りきりではなくて、細かいところはAIが自動的にやる。平田さんらの研究成果で、ビデオを見てただけで、研究の進歩が分かる。

ライバルにイーロン・マスクも

海外の動きも急だ。最近、注目されているのがイーロン・マスク。「Neuralink（ニューラルリンク）という会社を作って5年ぐらいだが、驚くべき開発スピードでやっている。僕らは15年で20億円、Neuralinkは400億円の資金調達です。ロボットを使って脳に針電極を刺している。技術的にはすごい。しかし、この方法はコスト的に問題がある」と嘆きを交えながら解説した。

BMIが切り開く未来像は魅力的だ。体内埋め込み装置でビッグデータを集められると、ディープラーニングを使って制御性能の向上が図れる。今のBMIの性能では対象患者はALSだ。性能が上がると、脊髄損傷、脳卒中へと、患者数が多い疾患に広がる。「例えば、脊髄損傷は若い人が事故で体が動かなくなるということ、年間の経済損失は3115億円とされる。社会復帰させられれば、3000億円の経済価値がある。お金には代えられないQOLの向上がある。将来は、健康な人でも、アバターやメタバースに使える」と力強く語った。平田さんの自信と決意に期待したい。

(会員 篠原亜希子)



多くの会員らが参加した3月例会

迫りくる核の破局リスクにどう対処すべきか

長崎大学核兵器廃絶研究センター長の鈴木達治郎さんからの提言

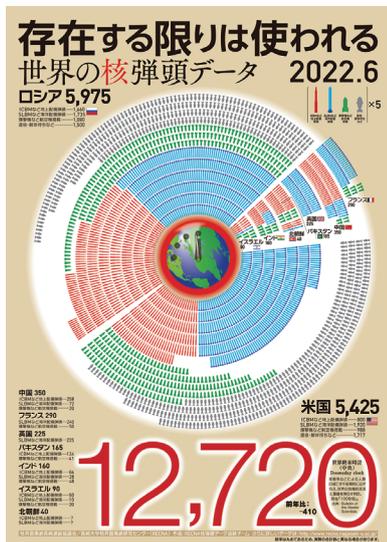
ロシアのウクライナ侵攻で核兵器使用が現実の脅威となるなか、4月17日の例会は、長崎大学核兵器廃絶研究センターの鈴木達治郎・副センター長に「迫りくる核の破局リスク」をテーマに話してもらった。「核兵器が最初に撃ち込まれるのは核超大国ではなく、日本などだろう」など、刺激的な話が続いた。講演はオンラインで行われた。

残り90秒の終末時計

鈴木さんは「終末時計が今年、ついに90秒になった。昨年6月の世界の核弾頭の数12,720発。冷戦時代の7万発からは大きく減ったが、退役・解体待ちの弾頭の数が増えているだけで、軍用核弾頭の数ほとんど変わらない」と、同センターなどが作ったポスターを示しながら説明した。

ロシアが2020年に発表した核戦略では「ロシア連邦の存在自体が危ぶまれるような脅威に対しては、通常兵器による攻撃であっても核兵器で対応する」とある。プーチン大統領がウクライナ侵攻に際して「(ウクライナは)我が国益への脅威だけでなく、国家そのものの存在に対する脅威である」と発言したときは、核兵器を使う覚悟があるのかもしれない、と驚いたという。

オバマ政権は「先制不使用」「唯一の目的(核兵器の役割は核兵器の使用抑止、核兵器の攻撃に対してのみ使用)」政策を採用しようとしたが、日本を



核兵器廃絶長崎連絡協議会／長崎大学核兵器廃絶研究センターが作ったポスター

含む同盟国の反対もあって導入しなかった。バイデン政権も「唯一の目的」政策の導入を明言したが、同盟国の反対であきらめた。「先制不使用は、撃たれたら撃ち返すので、核抑止の理論に基づいている。しかも、中国は宣言して

いる。やれば、核リスクは大きく下がるのだが、日本政府には通じない」と嘆いた。

最後に岸田政権のGX基本方針について話した。鈴木さんは「運転期間の延長は科学的根拠がない。止まっている間も劣化すると、原子力規制委員会が2020年に言っている。経済



鈴木達治郎さん

合理性についての根拠(データ)も示されていない」と厳しく批判。「私は、原子力は肩を壊したエース、と言っている。新しいエース(再生可能エネルギーなど)にシフトすべきだ」とまとめた。さらに「一番怖いのは原子力基本法の改正。理念を示す法律なのに、改正では『国の責務』として産業基盤の維持支援、運転期間延長、新設のための支援を明記している」と指摘した。

最初に被害を受けるのは我々

講演後の質疑も活発だった。

「核抑止は幻想ではないか」という質問にはこう答えた。

「核抑止を信じている人の多くは超大国同士ではまず、起こらないと考えている。最初に犠牲となるのは、日本、韓国、欧州。だから、拡大核抑止で守る、と言っている。核抑止論はリアリズムに基づいているといわれるが、リアリズムに基づけば、最初に攻撃されるのは我々だ、ということだ」

「ウクライナ侵攻でロシアが戦術核を使った場合、どうなるのか」という問いには「米国に対応の義務はないので、使わないと思う。間違っても、NATOの国に落ちた場合は使わざるを得ない。それが拡大核抑止だから」と恐ろしい予想を披露した。では、私たちはどうすべきか。

鈴木さんは「核兵器が使われたらどんなことになるのかを一番よく知っているのは日本人だ。市民が被爆の実相を世界に訴えていくしかない。最初に被害を受けるのは我々だ。それをもっと認識すべきだ」と語った。

「利益相反」が「科学」を歪めている

科学ジャーナリストにとって、公害・薬害事件の教訓は何か。今こそ、考えてほしい。

工場周辺の漁村で多発していた水俣病の病因物質を突き止めた1959年の熊本大学水俣病研究班による有機水銀説に対するチソ（当時は新日本窒素）側の言い分を要約してみよう。

- 戦前から水銀を水俣湾に流出させていたのに、なぜ今になって水俣病がでるのか

- 世界各地に同様の製法の工場があるのに、なぜ水俣だけなのか

- 使っているのは無機水銀だが、病因物質は有機化している

豊穡な海を世界で最も劣悪に水銀汚染していた加害者の発した疑問が、疫学、環境と人体の汚染の把握、動物実験を重ねた熊大報告への、クリティカルな反論になっていないのはおわかりになるだろうか。有機化のしくみはその時点で未知であったとしても、因果関係は否定されない。ほかにだれが水銀を多量放出しているのか（実は有機化は工場内で生じていた）。化学工業会の期待を背負った爆薬説やアミン説が東京の大学教授からも発せられ、原因あいまい化が図られる一方、昭和電工鹿瀬工場からの排水が新潟でも水俣病被害を拡大していた。

科学的には明らかなのに、当時のジャーナリズム

は権威に揺らぎ、因果関係あいまい化に加担してしまった（例えば、柴田鉄治：科学事件（2000））。

2011年福島原発震災がもたらした、小児・若年性甲状腺がん多発問題では、より複雑で国際的な因果関係あいまい化がみられる。原子放射線に関する国連科学委員会2020/21報告書公表後、2022年夏に来日した委員たちとのやりとりでそれが明らかになった（<https://www.unscear2020report-verification.net>）。被曝量を過小評価、因果関係ありとする論文は「批判がある」などとして切り捨てる。日本側情報提供者が長崎被爆体験者訴訟の政府側証人であるのをご存知かと問うと、「知らなかった。日本側の問題だ」とハース前議長。環境省が研究費を、外務省が報告書作成費を拠出。典型的な利益相反だ。利益相反の有無によって結論が異なる時、どちらが信頼できるのか検討したJASTJ会員も少なくないはずだ。

ジャーナリスト後藤秀典（経済5月号）は、福島原発事故の国の責任を否定した2022年6月最高裁判決をもたらした「裁判所、国、東京電力、巨大法律事務所系の系譜」をみごとに追跡している。科学と法理をあいまい化・無力化しようとする加害者側の動きは、法曹界を巻き込んでいる。真実を歪める「利益相反」の広がりを持たず（質・糾・糺・正）せるのも科学ジャーナリストの眼力だろう。

（会員 林 衛）

理事会から

3月の理事会は3月14日にリモートで開催しました。総会開催日を5月31日と決め、総会までの日程を確認しました。各委員会委員長、塾長は活動報告と来年度事業計画を作成し、3月末まで事務局に提出することとしました。倉澤企画委員長から来年度の月例会のテーマ案と講師候補について理事に提案要請がありました。科学ジャーナリスト塾の成果について高橋塾長から報告があり、またメンターを務めた理事から振り返りの感想や意見が出ました。初めて導入した講義のオンデマンド化は受講生から好評で多様な講師による講義内容も高く評価する声がありました。滝事務局長からJ賞一次選考会の結果の報告がありました。

4月理事会は4月26日にリモートで開催しました。室山会長から総会までの段取りの再確認がありました。議案書の内容を確認しました。元村J賞委員長から「科学ジャーナリスト賞2023」の選考結果の報告がありました。最終候補作の評価が例年以上に僅差であったため、初めて投票で受賞作を決めました。小出国際委員長から3月末にコロンビアで開催された科学ジャーナリスト世界会

議の参加報告がありました。小出委員長含め4人の会員が会議に参加しました。南米開催ということもあり開発途上国・新興国からの参加が目立ったそうです。会期中に世界科学ジャーナリスト連盟の年次総会が開かれる予定でしたが、コロナ禍の影響もあって連盟事務局の準備不足で総会が開けず、6月に改めて総会開催を目指すことになりました。滝事務局長から2022年度の会計報告がありました。事務局や月例会での支出増のため本会計は赤字決算となりました。J塾と国際委員会の会計についても報告がありました。

5月理事会は5月31日に通常総会後、日本プレスセンタービルで対面開催しました。総会で選任された理事の互選で会長、副会長、会報編集長、Web編集長、事務局長を選任。各理事の担当を決めました。滝事務局長から日本科学振興協会（JAAS）から年次大会関連イベントへ協力要請について報告があり後援することなどを了承しました。瀧澤会報編集長から会報の編集体制について説明がありました。室山会長がJASTJの今後を考える議論を始めたいとの考えを示し、理事に意見を求めました。

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2023年6月現在)

 <p>AE海老名・綾瀬法律事務所 <small>科学技術に強い法律事務所です。</small> 弁護士 中道 徹 (神奈川県弁護士会) AE 海老名・綾瀬法律事務所</p>	<p>TOSHIBA 株式会社東芝</p>
 <p>花王株式会社</p>	 <p>公益社団法人 日本アイソトープ協会 Japan Radioisotope Association 公益社団法人 日本アイソトープ協会</p>
 <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構 Japan Science and Technology Agency 国立研究開発法人 科学技術振興機構</p>	 <p>株式会社 日本医工研究所 Japan Medical Engineering Institute 株式会社日本医工研究所</p>
<p>CACTUS カクタス・コミュニケーションズ株式会社</p>	 <p>JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE 日本学術振興会 日本学術振興会</p>
 <p>株式会社構造計画研究所</p>	 <p>MAMEZOU K2TOP HOLDINGS 株式会社豆蔵 K2TOP ホールディングス</p>
 <p>株式会社コスミックコーポレーション</p>	 <p>理化学研究所 国立研究開発法人理化学研究所</p>
 <p>一般財団法人 新技術振興渡辺記念会</p>	 <p>国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構</p>
 <p>株式会社テックベンチャー総研</p>	 <p>ロート製薬株式会社</p>
 <p>東京理科大学 Tokyo University of Science 東京理科大学</p>	<p>賛助会員募集中</p>

■ 新入会員の自己紹介

● 藤井 義大 (有限責任監査法人トーマツ)

有限責任監査法人トーマツ (現在金融事業部パートナー) にて、公認会計士として金融、メーカー、卸、小売等に対する監査・コンサルティング業務に従事してきました。主な著書に「ビジネスと経営のためのロジカルシンキングとしての弁証法」(日本橋出版)。灘中学校・灘高等学校卒業。東京大学大学院理学系研究科博士課程中退。よろしくお願い致します。

● 榎 太一 (同志社大)

アナウンサーとして16年勤務した後、2022年から大学で科学コミュニケーション研究を始めました。地上波テレビが科学非関与層への重要なリーチ媒体であるという仮説に基づき、その特性と課題の量的・質的研究と、出演を含む実践に取り組んでいます。

● 鹿兒島 昌樹 (日本経済新聞社)

日経新聞や、雑誌日経サイエンスなどに在籍しておりました。日経では脳死臓器移植や再生医療といった医療問題や、環境問題などを取材・執筆。雑誌では新型コロナなどの誌面化、中高生向け科学講義などの実施に取り組みました。

● 植澤 紀子

お茶の水女子大学生生活科学部人間生活学科卒業。会社勤務を経て、2010年第39回NHK創作ラジオドラマ大賞を受賞し、ラジオドラマ・舞台などの脚本に携わる。その後、スイスへの転居をきっかけに小説執筆をはじめ、21年第8回新潮ミステリ大賞を受賞。現在、小説執筆をしています。

退会

遠藤豊子、大澤綾乃、桃木暁子

■ お知らせ

● JASTJのデジタル活動

JASTJは紙の会報のほか、インターネットでも情報を発信しています。Facebook とTwitterは公式アカウントを持っています。共に例会の案内を詳しくしています。noteも利用しています。「COVID-19 科学ジャーナリストのための情報整理」を作成しています。

HP以外の情報発信もすべてHPのホーム画面からアクセスできます。

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

会員の BOOKS

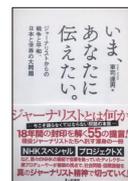
新刊紹介

「いま、あなたに伝えたい。 ジャーナリストからの戦争と平和、 日本と世界の大問題」

軍司達男著 (一粒書房、1650円 2023年5月刊)

「昨年暮れに「メディアの風の16年(上下)」を自費出版した後、これを1冊に絞り込んで若い世代の人たちに伝えたいという思いが湧いてきた。

そこで、新たに解説や最近のコラムも含めて構成し直し、単行本(265頁)として出版したのが上記の本である。ロシアの侵攻でにわかにな臭くなった戦争と平和の問題、日本が抱える課題の数々、人類が直面する大問題などを4つの章に分けて構成。日本人の戦争や核問題、地球温暖化や原発問題、科学技術の足元、AIやゲノム編集からメディアの現状、歴史認識などまで、不透明な時代にもを考える座標軸の一つになればとの思いを込めた。これで少し肩の荷が下りた感じ。(書店、Amazonでは「軍司達男」で検索してみてください)(会員 軍司達男)



「図解まるわかり 電池のしくみ」

中村のぶ子著 (翔泳社・1800円・2023年3月)

私たちの生活は電池に支えられ、電池はさらに世界を変えようとしています。

電池で身近なものといえば、乾電池、そしてスマホのバッテリーでしょう。一方、世界中が目撃しているのが、今後の電気自動車(EV)の普及のカギを握る、EV搭載用の電池です。それ以外にも電池には、ペースメーカー用の極小のものから、ビルのようなものまで、たくさんの種類があります。

この本では、今後、重要になると考えられる電池を出来る限り紹介しました。電池の基本的な知識から開発史、そしてEV搭載用電池の問題点など、広く電池の知識が得られます。

実は初めての自著となります。どうか必要な方に届きますように。(会員 中村のぶ子)



編集後記 ▶編集長を引き受けた3年前、コロナに対する不安が世の中に広がっていました。最近は日常を取り戻した人が多くなったように見えます。もっとも、本当に脅威が去ったのかは定かではありません。一方、昨年、ロシアがウクライナに侵攻し、原発攻撃や核兵器使用の不安が生まれました。こちらはまだ、解決の糸口が見えません。今号は巻頭言、例会、オピニオンで核に関する話題が出ています。3年も待たずに解決してほしいものです。編集長が次号から代わります。ありがとうございました。(能)

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル8階848
Email: hello@jastj.jp

会長 室山哲也/事務局長 滝順一
編集長 井上能行/副編集長 柏野裕美